

(6) 2016年(平成28年) 4月14日(木曜日)

聖書へブル語(ヘブライ語)を習い始めて驚いたのは、その単語が日本語に似たものが多いこと。最初は、偶然であろうと考えていたが、それがあまりにも多いことから、日本人が過去にへブル人と何らかの接触をしたことが分かる。

少し例をあげると、代名詞の「あなた」とへブル語の「アター」(原始セム語ではアナタ)、「我(われ)」と「エリー」や「アリー」(自分にとって)、否定を表す「いいえ」や「否(いな)」と「エイン」や「エーネナ」(うでない)、「あのおう」や「あのねえ」と「エアネー」(私が答えよう)、「歩く」と「ハラク」(アッカド語ではアラーク)、「量る」と「ハカル」など、無数にある。

神殿に関する言葉にも多くあって、「神主(かんぬし)」は、カアン(神聖)から派生した「コーエン」(祭司)のことで、「神」も語源

「いけにえの血を入れる丸い器」、さらに、「罪」は「タメー」(汚れている)、ダビデが踊りながら自分の町に運び入れた契約の箱は「ミク

### 南加キリスト教教会連合

## へブル語から日本語へ

浅井 導

が同じ。日本の正月の祝いは過越の祭で、「餅」は「マツアー」(種なしパン)、「お神酒(みき)」は「ムナキヤー」(神殿の中で神に捧げられる酒の器のこと)、また、罪の赦しの意味での「贖

とされた。また、聖書はイスラエルの民を神に選ばれた「宝」(スグラ)と呼んでいるが(出エジプト記19:6)、これは「すぐれる」という言葉。さらに、「まさに」は「マサー」(神の宣告)から来た言葉で、にせ預言者たちが嘘の夢の解き明かしをしていた時に、その裁きを宣告する神のお告げのこと

「ダシュ」で、「神興(みこし)」のこと。さらに、悪いことをしている人を叱る時に「こら！」と呼ぶのは、祭司職を求めてモーセに反抗したコラのこと(民数記16章)、彼は家族とともに地が裂けて地獄に落ちた(あがない)」は「アガ

ゼカリヤ書5章に出てくる「エバ升」(量を計る籠)は、いけにえとして捧げる鳥(鳩)のことでトルと呼ぶを入れるためにも使われたように、その口に重りとして丸い鉛の板が置かれたが、それが目のように見える。ゼカリヤが見た幻では、その中に入れられた鳥(女でもある)が人類の罪を意味し、その罪が量られた後、大きな翼を持った鳥(「ハシダー」(哀れみ)、鶴のような鳥)が、その籠をシヌアルの地の彼女の神殿に納めるために運んで行った。「籠目、籠目、籠の中の鳥は…」の歌は、どうもこの話が元になったものらしい。

取り入れられたへブル語の種類から判断すると、へブル人との接触があったのは第二神殿の時代の初めから中間時代にかけて、しかも、かなり聖書に詳しい人々(おそろく祭司たち)によって起きたと思われる。どうも、日本人の文化の中には、ユダヤ人の遺伝子が入り込んでいるようだ。(ダヴァール教会牧師)